

巻頭言

日本 ALS 協会北海道支部長
深瀬 和文

今回は自分の体験を述べさせていただきます。

8月に手術をしましたが、手術の内容は胆管結石でした。ちょうど悪いことに胆管と胆嚢がぶつかるところに石が詰まっていた。

痛みは3月頃から始まり、始めは胃が痛みしょうがなく胃カメラを飲みましたが何も異常がないと診断されました。痛みは続きましたが、6月まで我慢をして、6月にちょうど自宅の内装のリフォームが入ることになり、家にいられないのでレスパイト入院をすることになり、そのレスパイトのお陰で痛みの原因を知ることができました。

その時期は行事が重なっており、10月に手術の約束をして、内視鏡で胆石の詰まっているところにステントを入れ、胆汁が流れるようにしましたが、2週間で胆管炎と胆嚢炎を発症してしまいました。それでも大事な行事に参加するため強制的に退院しました。しかし胆嚢の炎症がひどく胆嚢の中に膿が蔓延して一部は破れて肝臓を侵していました。医師に大事な講演があることを説明し、胆嚢に管を入れて膿を出す努力をしてくれましたが、その講演は釧路で行われる予定であり、最低でも1泊はしなければならず、胆嚢に管を挿して釧路に行くことになることで付き添いのヘルパーが非常に心配をしていましたが、血液検査の炎症反応が下がらないので、仕方なく、諦めました。

自分の今回の体験を通して胃カメラを飲んで異常がないことに安心して、胆管の結石の痛みを我慢したことで、自分自身、長い間、痛い思いをし、回りのみんなにも心配を掛けてしまいました。もし胃カメラの検査で異常がなくてもすぐにセカンドオピニオンを受けていればこんな大事にならなかったと思います。

積極的にセカンドオピニオンを受けることをお勧めします。